



顔に 降りかかる雨

第39回江戸川乱歩賞受賞作

Natsuo Kirino

桐野夏生

顔に降りかかる雨

一九九三年九月一日 第一刷発行

一九九三年十二月二日 第三刷発行

著者 桐野夏生

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号 一〇二―
電話 (〇三) 五三九五―三五〇五 (編集部)

(〇三) 五三九五―三六二二 (販売部)

(〇三) 五三九五―三六一五 (製作部)

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 株式会社黒岩大光堂



定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本に
ついてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あて
にお願いたします。本書の無断複写(コピー)は著作権
法上の例外を除き、禁じられています。

© Natsuo Kirino 1993 Printed in Japan

顔に降りかかる雨

装幀 辰巳四郎

いやな夢を見ていた。

私はマイクロバスの後部座席に一人座り、どこかに向かっているところだった。どうやら、行く当てのない旅の途中らしい。

寂しい気分で窓から景色を眺めると、バスはちょうど広大なゴミ捨て場にさしかかっていた。白やブルーのビニール袋が荒野を覆いつくし、もうもうと土埃が舞っている。ところどころに高いゴミの丘があり、その表面は、風をはらんで風船のように丸くなったビニール袋が生き物のようにもそもそと動いていた。

外はよく晴れて暑そうだが、私は冷え切っている。マイクロバスの天井にあるダクトから、かび臭い冷たい風が吹き出っていて、私の全身に鳥肌をたてているからだ。

そのうち、どうも見たことがある景色だ、と私は気づく。

ジャカルタだ。ここはジャカルタの郊外だった。でも、どうしてジャカルタなんかにいるのだろうか。不思議に思っていると、サングラスをした運転手が振り向いて私に何かを指し示した。

ふと横を見ると、いつの間にかマイクロバスは交差点のようところで停まり、私の窓の外に人影が立っているのだった。目をしっかりと閉じた男が白いシャツを着た男に付き添われ、私の窓に向けて空き缶を差し出している。目の見えない物乞いらしい。その男とは窓越しに五十セン

チと離れていない。

思わず、私は男の堅く閉じられた^{まぶた}瞼を見つめた。すると、閉じた目から涙がにじんで頬に流れていくのが見えた。涙が、と思った瞬間、私はその男がインドネシア人ではなく、私の夫、博夫^{ひろお}なのだを知った。

私はたちまち深い悲しみと後悔と憎しみの入り交じった複雑な感情に打ちのめされる。博夫はここ、ジャカルタで死んだ。死んでしまったのに、彼はまだ私を苦しめる。博夫はふるふる震える手で空き缶を差し出したまま、涙を流し続けていた。

が、死者の何と懐かしいことか。思わず、バスの窓を開け、博夫に手を差し伸べようとする、背後から焦れた^じようなクラクションの音が聞こえてきた。もう出ますよ、というようなことを運転手は私に言い、クラクションも一定の間隔でせかすように鳴り続けた。

「待ってください！」

叫んだ途端に目が覚める。夢だったんだ。わかっていたが動悸^きが止まなかった。まだクラクションが鳴り続けているからだ。

クラクション？

その時初めて、クラクションではなく、電話のコールだということに気づいた。反射的にベッド横の、サイドテーブルがわりの椅子の上に置いた腕時計を見る。午前三時少し前だった。心臓の鼓動がおさまるに従って、汗がどつと吹き出してくる。その間、電話は鳴り続けていた。

夢の中の、博夫の陽に灼^やけた頬に流れた涙を思い出すと、電話に出る気はさらにしなかった。夫の死の知らせ以来、私は真夜中の電話には出ないと決めているからだ。じっと待っていると、

二十回以上は鳴ったコールが、グルルツと中途半端に鳴りかけて、ようやく止んだ。

留守番電話にセツトしておかなければならない。私はベッドから両足をゆっくりと板の間におろした。裸足の足裏に、べたつと床板が張りつくような異様な湿気が感じられた。外は強い雨が降っている。例年になく長く、そして雨のよく降る梅雨だ。

留守番電話をセツトして、もう一度ベッドに戻った。

小一時間はたっただろうか。うとうとしていると、またコールが鳴り出した。二つほど鳴ってから、すぐに留守番電話に切り替わった音がした。用件はあしたの朝、聞けばいい。バッドニュースならなおさらだ。そう思いながら、私は堅く目を瞑った。

いつものように十時過ぎに目が覚めた。雨の音はもうしない。隣の部屋に四人で住んでいるフイリピン人の若い女たちが、姦しくタガログ語で何か話しこんでいるのが、ベランダの方角から聞こえてきた。この梅雨空のもと、洗濯物を外に出すか出さないかでもめているらしい。

起き上がって、ブラインドを上げ、小さなベランダに面した窓を開けた。下を見ると、輪郭のぼんやりした白い霧が新宿の街を低く覆っていた。隣のビルの「個室サウナ 姫百合」の大きな看板の下半分がぼやけて見えるほどだ。十二階のこの部屋までは届いていないが、湿気と排気ガスの臭いが、いつもより濃く昇ってきていた。

「モーニン！ ミロチャン」

いきなり声がして、隣の部屋とのベランダのしきりから、女が一人、無理やり顔を突き出して手を振った。髪をひつつめて結び、浅黒い美しい顔に、丸い目がおどけている。一番若いシンシアという娘だ。私も手を振って応える。シンシアは外で会っても、まるで子犬のようなじやれ方

をする可愛い子だ。

「ゲンキー？」

元氣よ、と答えようとした瞬間、深夜の電話とあの夢のことを思い出した。

笑顔でシンシアに手を振ってベランダから離れると、私はすぐにデスクの上の留守番電話のボタンを解除した。いったいどの誰が、何の用でかけてきたのか、早く知りたかった。もしかすると、北海道で一人暮らしをしている父からかもしれない。だが、父はあんなに何十回もコールすることはしないだろうし、仮に何かがあったとしても、私を頼るような人間ではない。

応答テープの後には、しんとした沈黙が数秒間続いているだけだった。あれだけ鳴らしたのに、その人間は何の用事もなかったというわけだ。私は電話の横に立って、両腕を組み、少し考えこんだ。

誰かが酔ってかけてきたのかもしれない。あるいは、ただのいたずらのつもりが、留守番電話の応答でしらけたのだろうか。

一番考えられるのは、半年前までこの部屋の住人だった父に、急用で電話してきた人間が、私の吹き込んだ応答テープを聞き、間違いに気づいて電話を切った、ということだった。そうだ、そうに違いない。私はそう結論づけた。何しろ、郵便受けにはまだ父の会社名が残っているくらいなのだから。

そうは思っても、なんとなく不吉な予感がしてならない。それはきっと、あの夢のせいだ。まだマイクロボスのエアコンの風の臭いが皮膚に残っているような気さえる。私はざらついた不快さを早く忘れたいと両の頬をこしこすった。しかし、いくらこすっても不快さは消えないのはわかっていた。原因は悲しみなのだから。

何とか陽気な気分になりたい。FMをつけると、マービン・ゲイのカバーヴァージョンをロバート・パーマーが歌っていた。リフレインを一緒に歌いながら、着ていたTシャツとショーツを脱ぎ、タオル類と一緒に洗濯機にほうり込んだ。そして、シャワーを浴びた。屈託を思いつきり、からだから洗い流してしまいたい。

髪を洗い、丁寧にリンスをし、シャワーから出ると、気に入りのバスタオルでからだを拭いた。水滴を拭き取ると、ジェルバウムを全身に塗り、髪にはムースをつける。そして、からだによく馴染んだTシャツを頭から被ると、ようやく気持ちたちが落ち着いてきたのがわかった。

コーヒード豆を計量スプーンですくったところで、電話が鳴った。もう少しで完全に元気になるころなのに、と反射的に時計を見ると、もう昼近い。

「もしもし、村野ですが」

「ああ……そうか。……村野さんですよ。あの、新宿に越されたという村野ミロさんですよ？」

低くて深い男の声が、どこにかけたのかわからないといった迷いをこめて言った。

「そうですけど、どちら様？」

「失礼しました。私は成瀬と申します」男は慣れた感じで柔らかく言った。「耀子から、いいえ宇野正子さんから聞いてらっしゃるかもしれませんが、ナルセモータースの成瀬と申します」

「ああ……わかりました」

成瀬は、友人のノンフィクションライターの宇佐川耀子が近年、深く付き合っている男だった。

宇佐川耀子というのはペンネームで、本名は宇野正子という地味な名前なのだが、いつの間に

か、私もほかの友人も正子のことを、より華やかなイメージの耀子という名前で呼ばされている。

「はじめまして。お噂はかねがねうかがってます」

私が月並みなことを言うと、成瀬はこちらこそ、ときっぱりと返してきた。声といい、しゃべりかたといい、何か切迫したものを感じさせる。

「実はですね。耀子が部屋にいないのですが、そちらに伺ってませんか？」

「いいえ、来ていません」

成瀬は困ったように、もう一度言った。

「本当ですか？」

「本当です」

私の口調に、疑われた不機嫌さが露わになったらしく、成瀬は謝るように言った。

「申し訳ありません。こんな失礼な言い方をして」

「いいえ、構いませんけど。あの、いないというのは？」

「ええ、今日、私と重要な用事で会う約束をしていたんですが、部屋にいないものですから」

「はあ、そうですか」

「彼女から何か聞いてらっしゃいませんか？」

「どんなことですか？」

「近況です」

「それは、……近況ならいろいろと話しますけれど、例えばどんなことかしら」

近況の内容は、と聞かれても、おしゃべりのほとんどは近況としか言いようのないとりとめも

内容もないものだった。

「例えばですね。耀子はどこかに行くとか言ってませんでしたか？」

成瀬は困り果てたように尋ねた。

「さあ。特にそういうことはないですけど、旅行に行きたいというようなことじゃないですね」

「旅行でも何でもいいんです。どこかに行きたいと言ってましたか？」

成瀬は執拗に尋ねる。成瀬の質問に答えることは、耀子をするような気がして、私はだんだん不快になってきた。

「さあ、そういうことでしたら、気がつきませんでした」

きっぱりと断ると、成瀬は敏感に察したらしく謝った。

「突然、こんな話をして申し訳ありません」

はあ、と訳のわからないまま、曖昧に相槌を打つと、成瀬は私のマンションの名を尋ね、それではまたお電話します、と言って電話を切った。

受話器を持ったままぼんやりしていると、あの夜中の電話は、耀子からだったのだという直感がわき起こってきた。私自身はオカルティックな人間ではないが、こればかりは説明できない靈感のようなものだ。耀子は、どうしても私に伝えたいことがあったのかもしれない。出ればよかった、と私は後悔した。

何となく落ち着かない気持ちのまま、朝刊を広げ、できたてのコーヒーをマグカップに注いだ。いつもの癖で真っ先に天気予報を見ると、午後からの降水確率は七十パーセントとなっている。もう七月も半ばというのに、梅雨前線が本州の南海上に逆への字型に張りついて、動かない

らしい。

私は窓からどんよりと曇った新宿の空を見上げた。こんなに天気が悪いのに、耀子はどこに出掛けたのだろうか。いや、どこにも行っていない。きつとたいしたことではないのだ。二人は喧嘩でもして、怒った耀子が成瀬にちよっぴり心配させたくて飛び出したのかもしれない、と私は樂觀的に考えた。

耀子は成瀬に夢中だった。耀子の口から成瀬という名が出るたび、隠しようのない情熱と執着が滲み出ていた。

コーヒーは苦く熱く、私は舌を火傷しそうになった。マグカップをテーブルの上に置き、ふと隅に置いてある電話を見た。成瀬の電話の調子が緊迫していたことが気にかかって仕方がない。私は新聞を読むのを諦め、最近の耀子との接触で、耀子が無か漏らしていなかったかを思い出そうとした。

たしか耀子と最後に話したのは、ほんの三、四日前の午後、いつもの軽い調子でかかってきた電話だった。耀子という人は、用事のある時は本当に用件だけで、あまり無駄話をしない。その電話も、事務所からだったと記憶している。

「あたしだけど」で始まり、耀子は用件も言わずにいきなり、「来週の火曜の夜、空いてる？」と尋ねた。

私は相変わらずだと思い、答えた。

「いつでも空いてるわよ」

「だったら、川添桂先生のパフォーマンスに行かない？ 六本木なんだけど」

「川添桂って？」

「覚えてないの。耽美小説書いたり、ヴァイオリン弾く先生よ。一度見に行ったことあるでしよ
う」

「ああ、あの」

と私は思い出したが、あまり興味がなかったせいか、それほど印象は強くない。

「ちょっと気になることがあるのよ。つきあつて」と、耀子はわりと強引に言つた。「これから、そのチラシのファクス入れるから、切り替えてくれる？」

「わかったわ」

「じゃあね」

これだけだった。思えば、少し元気がなかったような気もするが、電話の印象ほどあてにならないものはない。私は、その時ファクスされたチラシをデスクの引き出しから出して眺めた。

『暗黒夜会 エロスとデイシプリン』と書いてあり、女が黒いレザーのボンデージの衣装を着て、ニップルのピアスを自分の指で引つ張っている写真が印刷されていた。耀子はこの手の催しが大好きだった。

その時、インターフォンが鳴った。このマンションはオートロックなどというしやれた作りにはなっていない。インターフォンが鳴った時は、すぐドアの外に訪問者が立っているという仕掛けだ。大きめのＴシャツを着ていただけの私は、急いでジーンズをはいた。

「はい、どなた？」

「成瀬です」

「ちょっと待ってください」

本人がやってきた。私は驚いて玄関に向かった。

「突然、うかがって申し訳ありません」

ドアを開けると、がっしりした背の高い男が私の目をじっと見つめながら、軽く礼をした。黒のポロシャツ、インディゴブルーのジーンズ。色落ちのまったくしてない堅そうなジーンズが、男の雰囲気によく似合っていた。陽に灼けたごつい腕に、大きなダイヴァーズ・ウォッチをしている。年齢は四十二、三歳と聞いていたが、もっと若く精悍せいかんに見えた。

私は驚いていた。想像していた男とは、あまりにも違っていたからだ。耀子の話では、成瀬はかなりやり手の中古外車ディーラーで、時には怪しげなこともする、ということだった。

例えば、成瀬のガレージにちよつとした修理に出すとする。ルームランプがひとつつかないとか、冷房のスイッチがバカになったとか、そんな小さなことで。すると、なかなかでき上がらない。言い訳はいつも部品の在庫切れか、工場の順番待ちだ。そして、ようやく車が戻ってきた時は、どういふ訳かトリップメーターが百キロぐらい増えているのだそうだ。

『もしかするとあたしの車、代車に出しているんじゃないかしら。でなければ、従業員が乗り回しているんじゃないの』

耀子がそんなことを口にしたのを、私は覚えていた。だから、成瀬という男については、何となく、イタリア製のスーツを着た口先ばかりの優男を想像していたのだった。しかし、ここに現れた男は、見かけだけは男らしく誠実そうに見える。

だが成瀬の目付きは、やはり並の人間より数倍鋭く、それに聡かった。私に挨拶すると、耀子の靴がないかチェックし、それからすぐに、狭い2DKの私の部屋を油断ない目で隈なく見渡した。耀子の物はひとつとて見逃さない、という雰囲気だった。

「耀子は来てません」

「そうでしょうね」

成瀬は私のほうを見ずに、ほほ笑んでつぶやいたが、その様子は私を怖がらせた。なぜなら、成瀬は私の言うことなど全然信じていなかったからだ。

「上がっても？」

成瀬はワークブーツの紐を解き始める。

「どうぞ。どうせ、いやだつて言っても上がるつもりなんでしょう？」

私は腕を組んで壁に寄りかかり、強引な成瀬を呆れて眺めた。こんな、突然やってきた男に威圧されるのは不快だった。

「ええ」

成瀬は構わず靴紐を解き続けている。すると、ドアが勢いよく開き、もう一人パンチパーマの若い男が入ってきた。手に携帯電話を持ち、私と目が合っても挨拶ひとつせず、反対に威嚇するように肩をそびやかした。私は、彼の派手な服装に思わず目を見張った。

鮮やかなブルーやエメラルドグリーンの抽象的なパターンシルクシャツに、ブルーのパンツ。とても柔らかそうな紺のなめし革で作られたスリッポン。ゴールドの太いネックレスとお揃いのブレス。そして、ダイヤ入りのゴールドのロレックス。もし、服が本物のヴェルサーチエダとしたら、上から下まで四百万円といったところだろう。勿論、普通の仕事をしている人の格好ではない。私は、かつて父の事務所に出入りしていた人々を思い出していた。常識が通用するよう見えて、通用しない人々だ。

「なるほど、このネエちゃんかよ」

若い男は成瀬に軽く頭を下げると、私の顔を見て脅すようにぐちゃつと言った。かすかに北関東訛りがある。

「君島さん、あんたはそこで待っていてくれ」

成瀬はにこりともしないで、男に言いつけると、自分は勝手に私の部屋に入ってきた。後を追おうとすると、君島と言われた男が、何も言わずに私の腕を押さえた。

「何すんのよ！」

腕をもぎ離すと、彼は私の見幕に一瞬驚いたようにあっけなく離してくれた。そして、自分の反応が自分でも悔しかったと見え、小さく舌打ちすると、玄関に置かれた私のサイドゴア・ブーツの横に唾を吐いた。唾が中に入らなくてよかったと思いがちながらも、私は、つっぱり中学生がそのまま大きくなったような君島を薄気味悪く思った。

「村野さん、すみません。ちょっとこっちに來てください」

勝手に中に入った成瀬が私を呼んだ。耀子を探して、バスルームやトイレ、ベッドの下まで無断で覗いたらしい。

私は返事をせずに、君島と一瞬睨み合った後、ゆっくりと自分の部屋に戻った。怒りに紅潮した私の顔を見て、成瀬が初めて、少し笑った。

「すみませんね」

「ともかく」私はどすんと椅子に腰をおろした。「どういふことなのか、説明していただけませんか」

「説明ってほどでもない。出来事は単純だし、まだ何にもわからないのです」

成瀬は不機嫌に言い、自分にうんざりしたように軽く肩をすくめた。目はベランダの隅にほつ

たらかしてある枯れたポトスを見ている。

「要するに、耀子が大金を持つていなくなつたんです」

「ウソでしょ！」私は大きく眉をつりあげて叫んだ。「絶対に変です！ 耀子がそんなことするわけがないわよ」

成瀬は私に視線を戻すと、疲れたように笑った。

「僕もそう信じてました。でも、本当です。彼女に預けた四千七百万円ごと、どっかに行つてしまった」

四千七百万円と聞いて、私はコトの重大さに打ちのめされた気がした。成瀬や、君島とかいう男が飛んでくる理由がわかる。それでも、何かが間違っているのだという確信があつた。それは耀子が、私の友人たちの中で一番賢く聡明だという確信だつた。大金を持つて逃げるような馬鹿な真似は、絶対にしないはずだ。

私はちらつと成瀬を見た。成瀬は何かを思索しているように、ぼんやりと私の顔を眺めている。きつと、成瀬にも同じ思いがあるのだろう、と私は考えた。

「どつかつて、どこにですか？」

「それがわかれば苦労しません」

成瀬は勝手に椅子を引いて、自分も腰掛けた。ダイニングテーブルに向かい合つて座ると、私たちは初めて、相手を観察するように正面から顔を眺め合つた。成瀬は頬の肉が薄く、目付きが鋭い。ハンサムな男だつた。が、体力も気力も消耗したというように、目が血走り、目の下に隈ができてゐる。

「そんなお金、^{カネ}いっただいどうして」と、私が呟くと、